カトリック教報

カトリック長崎大司教区
広報委員会
〒852－8113
長崎市上野町10－34
カトリックセンター内
TEL 095－843－3869
FAX 095－843－3417
振替口座 01880－5－2699
発行人
山田良秋
印刷所
株式会社 藤木博英社

教皇さまの意向

・宣教　信仰を伝える仕事にある人たちがふさわしいことばを見いだすことができるように
・日本　降誕祭の真のよろこびが人々に深く理解され、福音が広く宣べ伝えられるように

牢屋の窄殉教150年
苦しみを受けようとも「幸い」を信じ

10月28日（日）、下五島地区久賀島の牢屋の窄殉教150年祭が盛大に執り行われた。参列者は12時に福江市立久賀小・中学校に集合し、そこから150年前に牢屋の窄に向かった先祖たちが辿った道を、ロザリオ行列をしながら歩いた。牢屋の窄殉教地に到着した参列者は「信仰の碑」と「牢死者の碑」に向かって花をささげ、この地で殉教者だけではなく、牢に入れられ迫害された人々の苦しみの大きさとその信仰の偉大さにあらためて頭を垂れた。

13時から高見三明大司教司式のもと、殉教記念ミサが執り行われた。

ミサの初めには、この節目の年に合わせて新調された牢屋の窄殉教記念碑の碑文朗読が行われ、この地で起こった迫害がいかにむごいものであったか、またそれに耐えた信者の信仰がいかに私たちに勇気を与えてくれるものであるか、確認させられた。

高見大司教はミサの中で、「先祖の方々がこの地でどんなに苦しみを受けようとも、先ほどの福音で読まれた『真福八端』のイエス様の『幸い』を信じ、信仰を世に証ししました。時代は変わり、私たちには同じような迫害はありませんが、さまざまな誘惑が多い現代世界にあって、ここで迫害され殉教していった先祖たちと同じように、私たちも自分に与えられている場においてイエス様の福音を証ししていくことができるように、特にこの地で殉教した殉教者の助けを願いましょう」と参列者を励ました。

また、今年は浦上四番崩れから始まった「旅」の150年の節目の年にあたることにも触れ、日本の各地で迫害され、殉教した人々が、カトリック教会として正式に福者・聖人の列に加えられるよう、共に祈りをささげるようにと促した。

牢屋の窄へ向かうロザリオ行列

牢屋の窄殉教地に到着した浜脇小教区の担当者の一人は「当日は350名ほどの参列者を迎え、長崎や上五島からもたくさんの巡礼者の方々にお越しいただき、共にこの記念の行事ができたことを感謝申し上げます。特に、殉教者や牢に入れられ苦しみを受けた人々の気持ちを少しでも感じようと、浜脇の港まで行き帰り徒歩で巡礼された方々には本当に頭が下がりました。また、浜脇小教区をあげて長い時間をかけて準備してきたこの記念行事が、大きな事故などもなく無事に終わりましたことを神様に感謝いたします」と語っていた。

パウロ6世とロメロ大司教 列聖

10月14日（日）バチカンで、教皇、司教、司祭、修道女、信徒ら7人の列聖式が教皇フランシスコによって行われ、新聖人らにゆかりのある国々などから多くの人々が集まり、共に祝った。そのうち特に「わたしたちと同じ時代に牧者として生き、キリストの証人として生きる道を示した」（日本カトリック社会司教委員会）2人の聖人、聖パウロ6世教皇と聖オスカル・ロメロ大司教の取り次ぎと励ましによって、現代社会の正義と平和の実現のために力を尽くすことが願われている。

聖パウロ6世教皇
（1897～1978）

本名ジョヴァンニ・バッティスタ・モンティーニ。1963年6月21日、教皇に就任。聖ヨハネ23世から引き継いだ第2バチカン公会議を、多くの困難を乗り越えながら実り多い閉会へと導いた。65年公会議に参加した司教たちの要望に応えてシノドス（世界代表司教会議）を設置、67年に第1回シノドスを開催した。68年1月1日には、ベトナム戦争激化の中で平和メッセージを全世界に呼び掛け、これ以後、元旦を「世界平和の日」に定めた。多くの回勅を発表し、中でも68年の『フマネ・ヴィテ』では、生命の尊さを説いた。

聖オスカル・ロメロ大司教
（1917～80）

オスカル・アルヌルフォ・ロメロ・イ・ガルダメス。1942年ローマで司祭叙階。出身国エルサルバドルに戻り、20年間、小教区の主任司祭を務めた。70年サンサルバドル補佐司教、74年サンチアゴ・デ・マリア司教、77年サンサルバドル大司教。この頃から国内で政治危機が発生し、次第に内戦へとつながる。厳格で簡素な生活をおくり、深い精神性に育まれた大司教は、貧しい人々を愛し、人権を擁護した。80年3月24日、ミサをささげている最中に暗殺された。国際カリタスの保護者。2015年に殉教者として列福された。

マニラ司教座聖堂の再建・献堂60年記念ミサ
前田枢機卿、教皇特使に

10月29日付のバチカン・ニュースによると、教皇フランシスコは、マニラ司教座聖堂、再建・献堂60年記念ミサの特使に、前田万葉枢機卿を任命された。

2018年12月8日、「無原罪の聖マリア」の祭日、フィリピンの首都マニラで、同大司教区のカテドラルの再建と献堂60年を記念するミサが執り行われる。マニラ大司教区のカテドラル、無原罪の御宿り大聖堂は、第2次世界大戦後に再建・献堂された。この記念ミサへの特使として、教皇フランシスコは10月27日、大阪大司教区大司教、前田万葉枢機卿を任命された。

先祖の信仰をたたえる
キリシタン洞窟ミサ

10月14日（日）、土井ノ浦小教区（川端志範主任司祭）は上五島地区の信徒と共に、土井ノ浦沿岸のキリシタン洞窟でミサをささげた。天候や波の高さの影響のために3年ぶりの開催となったこのミサには120人を超える多くの方が参列し、祈りと聖歌を響き渡らせた。

ミサの後は、土井ノ浦小教区の信徒たちが準備した、ハマチの刺身やそうめん、おにぎり、ふくれまんじゅうが振る舞われ、参加者たちはそれぞれ岩肌に腰を下ろして、食事を楽しむひとときを過ごした。

このミサは、キリシタン迫害の後期、五島での最後の迫害である「五島崩れ」の際に、捕縛を逃れたキリシタンの三家族が、海からしか渡ることのできないこの洞窟に逃げ込み、漁師に発見されるまでの2カ月間をひそかに暮らして信仰を受け継ぐための犠牲をささげたことを記念するもの。土井ノ浦ではこの洞窟は、先祖の信仰を思い起こす場所として古くから大切にされてきた。近年は長崎の教会の世界遺産登録に伴い、信者でない方にも周知され、来訪者も増えてきているが、信者にとっては、自分の信仰が犠牲とともに受け継がれてきたものであることを再確認する場所となっている。地元では「先祖の思いを大切にし、子どもたちへと受け継いでいく、そのための恵みを願いたい」との思いがある。

撮影／松田典子

生月・黒瀬の辻殉教祭
188福者の列福10周年も記念

188福者に加えられているガスパル西玄可とその家族をたたえる「黒瀬の辻殉教祭」が11月11日（日）午後1時から、黒瀬の辻殉教碑公園で開催された。今年は福者の列福10周年を記念し、高見三明大司教主司式で平戸地区の司祭8人、修道者、信徒200人余が集まる中、ミサがささげられた。

大司教は説教の中で、「列福式ミサを覚えている人もいるでしょう。ガスパル西玄可は優れた信仰者であると同時に奉行としても一目置かれた人物でした。殉教によって明らかになった『命までも惜しまずささげるイエスへの愛』は、周囲の人々を力づけました。振り返って私たちも、イエスに自分自身をささげて生きていますが、どこかでささげ尽くしていないかもしれません。『これだけはささげることができない』と、例外を置いていることがあります。これは誰もが陥る誘惑なので、もう一度福者の生き方に謙虚に耳を傾け、すべてを神に委ねて生きることを確認し、福者の取り次ぎを願いましょう」と呼び掛けた。

今年は、平戸地区内の各小教区がそれぞれ独自の奉納物を用意し、パンとぶどう酒に合わせて奉納した。山田小教区は1年にわたり、毎週個別の家庭のため全世帯で祈ってきた。他の小教区も工夫を凝らした取り組みを奉納し、記憶に残る殉教祭ミサとなった。

ほしかげ

高校生たちを連れて、沖縄へ平和学習に、毎夏通っている。ご存知のように沖縄は、日本で唯一地上戦が行われた場所である。この地上戦で多くの人が亡くなったが、沖縄の人々はこの苦しみの中から、敵味方の区別なく弔う心を学んだ。けれども、犠牲を強いた人々は、「いじめる」ことしか今でも考えていない。地上戦はまだ続いているのである。沖縄の人々は、平和な、穏やかな生活を子どもたちに伝えたいだけなのに、それが許されないのである。そのために、日本人の美徳といわれていたものが次々と失われているように思う▲私たちは、自分たちをどう子どもたちに伝えるのだろうか？　信仰の伝達も同じような現状になっているのではないだろうか？　信仰教育は学校教育と同じように人任せになっている。学校教育は、人を育て、心を育てる場にはなっていないように思う。両親の果たす役割は、より重要になっているはずなのに、それを十分に果たしていない家庭が増えている。人を育てる、心を育てるということに、真剣に取り組まなければならない時がきている▲このためには、本当に信じ合うということが求められる。信じることのできる人の言葉は、聞いた人の中に生き続けるからである。生きる言葉を語り合いながら、苦労をし、心を育てる家庭が望まれている。信仰を、語り伝える家庭を目指そう。

（土台の岩）

Synod 2018　Youth, faith and vocational discernment　「若者」をテーマにしたシノドスに向けて

教会はいつも新しくなる⑪（最終回）

たとえば、ワールドユースデーという機会

教区青少年委員会 委員長　山口竜太郎

来年1月パナマでワールドユースデーが開催されます。1984年に教皇ヨハネ・パウロ2世が青年たちにローマに集まるようにと呼びかけたことから、翌85年に始まります。それから毎年、受難の主日（枝の主日）を「世界青年の日」として定め、2～3年ごとに世界各地でワールドユースデーの世界大会が開催されています。

大会に参加した青年が体感するのは「こんなにたくさんイエス様を信じている同じ仲間がいるのか」ということです。一つの信仰を持つ青年たちが世界から集い、出会いを喜ぶという体験をします。青年たちは自分がキリスト信者でよかったということを肌で感じます。今の自分が恵みの中にあるということへの気付き、ミサって、祈るってこんなにいいものなのだ、などこれまでの生活では考えなかった「信じる」ということの意味に触れています。機会があればカトリック中央協議会のホームページからこれまでの大会に参加した全国の青年たちの姿と声に触れることができますので、ぜひご覧になっていただければと思います。

もう一つワールドユースデーには大切な要素があります。教皇様と青年たちが一緒にキリストの受難と復活の神秘を黙想し、祝うということです。教皇様は毎年、世界青年の日に青年たちにメッセージを出されます。2017年は「力ある方が、私に偉大なことをなさいましたから」。2018年は「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」。そして今回のワールドユースデーのテーマとしては「私は主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」を掲げられています。教皇様は「マリアは皆さんと同じ、一人の青年期の若者です」と言われ、同じ若者としてのマリア様を見つめるようにと示しておられます。もちろん大会に参加する若者だけにではなく、すべての若者に向けての言葉です。

「マリア、恐れることはない。」

マリア様が天使のお告げを受けた時の心情を教皇様は想い、語られます。「マリアはひどく戸惑ったことでしょう。また、それまで知らなかった自分の真の姿と召命を初めて告げられ、さぞ驚いたことでしょう」そして若者たちとマリア様の姿を重ねて、若者たちの多くも今、多くの恐れにとらわれている、と見ておられます。

「多くの皆さんが抱いている『根本的な』恐れは、自分という人間が愛されてもいない、好かれてもいない、受け入れられていないのではないかという恐れです。…本来の姿とは別の姿にならなければならないと感じています。自分の姿を『画像修正』し続け、仮面と偽りのアイデンティティーの後ろに隠れ、まるで自分自身を『偽造（フェイク）』しているかのようです。多くの人ができるだけ多くの『いいね』を得ようと躍起になっています。自分が不十分であるという心情から、多くの恐れや不安が生じています」

「『なぜ怖がるのか。まだ信じないのか（マルコ4・40）』。弟子たちを叱責するイエスのこの言葉は、不信ではなく恐れが信仰の妨げとなることがいかに多いかを物語っています。…私たちキリスト者にとって、恐れは最終的なものではなく、神を信じ、いのちを信じるための機会にほかなりません。それは、神が与えてくださったものは根本的に善であると信じ、たとえ不可解に思える状況や逆境を幾度となく通っても、神は私たちをよい結末に導いてくださると信じることを意味します。しかし、もし恐れを増大させるなら、私たちは自分の中に閉じこもり、すべての物事や人から自分自身を守るために防壁を築き、身動きが取れなくなるでしょう。立ち向かってください。決して閉じこもらないでください。聖書では『恐れるな』という表現が、あらゆる形で365回繰り返されます。まるで主は一年中毎日、恐れから私たちを解放したいと思っておられるかのようです」（2018年『世界青年の日』教皇メッセージ）

教皇様が青年に与えている勧めは、マリアが年老いたエリザベトのもとに行き、助け、互いの驚きと喜びを分かち合い、祈ったように、教会にいる年配者、司祭、修道者と出会い、話をしてほしいということ。伝統や自分のルーツに触れ、そこに「未来を築くための創造的な忠誠心」によって自分に与えられている召命、神様から与えられたいのちの使い方を祈りのうちに探ってほしいと言われています。「人生の扉を開け放ってください」「神は、マリアにそうされたように、私たちの心の扉を叩いておられます」

ある青年の体験

2005年のドイツ・ケルン大会に参加した一人の青年が心に残った出来事として次のような感想を残しています。

「移動中のバスの中で同じグループの青年が旅の感想を含め、今自分が感じていることは何かと尋ねてきた。自分のことを話すのがなんだか照れくさくてはぐらかしていると『○○ちゃんは、そっけない顔をしていろいろ考えこんでいるんじゃない？　話してごらん』と私の心の中が見えているかのようだった。自分でも何を言っているかわからないくらい動揺しながら心のうちを話した。彼は真剣に最後まで聞き、…私に対してのアドバイスとして一枚の絵を紹介してくれた。その絵は一枚の扉を表した絵だという。扉の内側には自分がいて、外側にはイエス様がいる。しかし、その扉の外側にはドアノブが付いていない。外から開けて入ることはできないのだ。さらにその扉には茨がたくさんついていて、イエス様はただひたすら扉をノックして内側にいる私たちに呼びかけていてくださるのだという。もちろんイエス様の手は傷だらけになるだろう。それでも私たちが扉を開けるまでイエス様は呼びかけ続けるのだ。その話を聞きながら私は絵を想像してみた。こうしている今も、イエス様が手を痛めながら私に呼びかけていてくださるのだと思うと早くその呼びかけに応えたいと思った」（記録文集）

キリストとの出会いによって変えられていく喜び。人生の歩みの中でそんなに数多く出会うことではありません。例えば、ワールドユースデーという機会によって何でもないと思っていた日常や手ごたえのないむなしい日々にも「主はともにいてくださった」という光を見いだし、力を得ています。教皇様の言葉や、参加者同士での分かち合い、祈りを通して自分自身を振り返り、今を見つめ、これからを大事に生きていきたいと思うチャンスを得ています。大会から帰った若者は自分の中だけに喜びをしまい込もうとはしません。喜びを知っているからこそ、忙しくても時間を作り、知り合いに呼びかけ集まろうとします。話をしたり、聞いたり。笑い、食事をし、感謝し、祈る。喜びは伝わっていくし、喜びは力となっています。

「神が若者の心に触れると、その若者は真に偉大なことができるようになります。全能の神がマリアの人生において成し遂げた『偉大なこと』は、私たち自身の人生の旅路にも当てはまります。それは意味もなくさまよう旅ではありません。この旅はあらゆる不安や苦しみを伴っていますが、神において完成します」（2017年『世界青年の日』教皇メッセージ）

教会に強く求めるものがあったり、教会のことを気にも留めていなかったり、関わりたくなかったり。良いところを知っていたり、傷つけられたり、ニュートラルの状態であったり。様々な状況にあり、心情を抱きながらも信者として若者たちは生きています。満たされ、納得できることばかりではないでしょう。でも、支えてくれる人はいて、笑い合える仲間もいて、ずっと待っているイエス様がいます。大丈夫です。「恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」。神の恵みは一瞬で終わるものではなく、ずっとこれからも私たちの中にあるものです。

ワールドユースデーへ

長崎教区から青年ら参加

来年2019年1月22日から27日まで、ワールドユースデーパナマ大会が開催される。大会テーマは「わたしは主のはしためです。お言葉どおり、この身に成りますように」（ルカ1・38）。参加資格は18歳～35歳（国籍不問）で、日本の公式巡礼団は勝谷太治司教（札幌教区）を団長に、青年約50人と同行スタッフを合わせた計60人余が参加する予定。

長崎教区からは計6人、青年として信徒1人と修道者2人が、また、同行者として司祭1人と修道者2人が参加することになっている。

2019年ＷＹＤパナマ大会（ワールドユースデー）ご支援のお願い

日本カトリック青少年司牧部門から以下の連絡が届いています。ご協力をお願いいたします。

1．霊的支援

ＷＹＤが青年たちにとって信仰を深める機会となり、キリストの弟子としての固有の召命を見いだすことができるようお祈りください。

2．募金

ＷＹＤを実りあるものとするため公式日本巡礼団事務局運営の充実が必要です。募金にご協力ください。2019年2月28日まで受け付けています。

送金方法（振替）
ゆうちょ銀行　（宗）カトリック中央協議会 WYD口
口座番号 00170-1-315740

キリスト・イエスに結ばれて

日本カトリック神学院として最後の神学院祭

２キャンパス制での神学院祭は今年まで

11月3日（土）、日本カトリック神学院福岡キャンパスで「神学院祭」が開かれ、福岡教区内外から1200人を超える多くの方々にご来場いただきました。

日本カトリック神学院としては最後の開催となる今回の神学院祭のテーマは「キリスト・イエスに結ばれて」。野外ミサでは副院長の湯浅俊治神父様が主司式を務められ、説教では東日本大震災の出来事に触れながら、日本カトリック神学院としての10年間、多くの方々からご支援をいただいたことに感謝するとともに、来年4月開校する東京・福岡の両神学校のために引き続きご協力とお祈りをいただきたいと語られました。

ミサ後は、召命についてのシンポジウム、神学院ツアー、ロザリオ作り、古本市やマジックショー、神学生17人全員のシールを集めるスタンプラリーなど、各種イベントも好評のうちに終えることができました。皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

（神学科3年　青田憲司）

聖霊の導きを願い

佐世保で召命祈願ミサ

神学生と志願生ら（相浦教会前で）

10月28日（日）11時、佐世保地区の相浦教会に神学生や志願者、保護者や信徒らが集まり、召命の促進と完成を願って、6人の司祭の共同司式によるミサが行われた。説教を務めた中野健一郎師（大司教館・小神学院）は、「神の呼び掛けに素直に応じて集まった神学生・志願者が、雑音に惑わされず、これからも神様の呼び掛けの声をくみ取って、まっすぐに歩み続けることができるように祈りましょう」と語った。

ミサ後は、水産業を営むエテルナ・ワコーに場所を移し、大崎教会信徒の協力によって用意された食事会が開かれた。皆、新鮮な刺身やバーベキューなどのごちそうに歓声を上げていた。

参加者の1人は、「交流会を通してたくさんの叱咤激励を受けた神学生・志願者たちにとって、思い出深い楽しい一日となったのではないでしょうか」と話していた。

カルト問題や世界遺産

司祭研修会で知り、考える

秋の司祭研修会が、10月23日（火）カトリックセンターで、24日（水）長崎大司教館で開催された。初日の第一部は「カルト問題」について、日本聖公会司祭（東京教区宣教主事）の卓志雄（タクジユウ）師がスライドを使い、解説した（写真）。

卓師によると、日本でのカルト（特定の対象を熱狂的に崇拝し、社会的に物議を醸している宗教的団体）の多くは、韓国から流入したものだという。韓国人であり、20年以上日本に住む卓師は、カルトからの脱会に関する相談や資料作成など、多方面にわたって活動を続けている。質疑応答の場面で、韓国発祥のカルトがなぜ日本で被害を大きくしているのかという質問に対し、「カルト集団は興味を示す人に親身になってくれるし、居場所があると思わせてくれる。伝統宗教こそ、癒やしと回復を与える場になる努力が必要」との答えだった。

第二部は福岡教区崎津教会主任の渡辺隆義師から、今年世界遺産となった「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」に関し、天草の現状と課題の講話を受けた。住民が感じる日常生活の変化、聖堂内でのマナーなど問題はあるものの、プラスの面もある。今は受け入れた上での信仰生活の在り方を考えようとしていること、また巡礼の同行ガイドに教会側が情報提供し、正確な案内になるよう働き掛けているとの話しだった。

２日目は大司教による典礼・司牧に関する講話。特に司祭としての自覚と生活につながる点を、心身の健康の面と、奉仕と聖性の面から話された。その後、９月30日に開かれた「宣教のための特別月間第１回準備委員会」の報告が下窄英知師からあった。

死者の月・追悼ミサ

教区主催、滑石教会で開催

11月4日（日）教区主催の追悼ミサが髙見三明大司教様の司式により滑石教会で行われました。

今年から各地区持ち回りとなり、最初に長崎北地区が担当となりました。多くの教会で小教区行事と重なり、また周知不足のため参加者が少なく、5人の司祭を含む120人余の信者の参加となりました。入堂の鐘の音を合図に、滑石教会の聖歌隊による「Requiem（レクイエム）」の歌声の中、厳かにミサが始まりました。

大司教様は説教の中で、7地区持ち回りでの開催の経緯と、長崎教区で今年までに亡くなった司教・司祭・修道者の具体的な人数を紹介し、「数知れない亡くなった信徒のために祈ってください。私たちが亡くなった人のために祈るのは、その人を思い、尊敬し、愛しているからで、私たちも愛されていたからです」と話されました。

今回初めて浦上教会以外の場所で教区主催の追悼ミサが行われましたが、参加者が少なく、大司教様の思いが司祭・信徒に伝わっていないと感じました。担当地区は開催時間の検討や周知徹底を図ってほしいと思います。

長崎北地区評議会
議長　松山勝則
（滑石教会）

〝真の土台はイエス様ご自身〟

司教座聖堂献堂記念ミサ

司教座（カテドラ）聖堂（ラル）献堂記念ミサが11月4日（日）午後6時半、髙見三明大司教の主司式により司祭団10人と信者らの参加のもと浦上教会で行われた。記念日は11月1日だが、信者が参加しやすいようにと日曜日に実施された。

大司教は説教の中で、司教座（カテドラ）について次のように語った。「それは、司教が使徒たちの後継者として、ローマの教皇様と一致して権能をもってイエス様の教えを人々に伝え導くことを意味しています。すなわちそれは教会の一致のしるしになります」また、「このカテドラルで司教が司式する典礼、特にミサにおいては、司教と司祭団、修道者、信徒の皆さんが一つになって祈る姿が教会のあるべき姿、理想的な姿を表すもの」だと話した。

そして、「真の土台はイエス様ご自身であり、イエス様がおられなければ司教座の意味はない」ことも強調。最後に、教区の信仰共同体のために祈ると同時に、私たちが喜びのうちに信仰を伝えることができるよう祈りを呼び掛けた。

NCK公開講座が開催

『啓示憲章』テーマに

NCK（日本カテキスタ会）の公開講座が、長崎教区信仰養成部の協賛により大司教館第一会議室で、10月20、21日に開催された（写真）。テーマは『啓示憲章』で、聖書の分かち合いについての講話も行われ、他教区からの参加者を含む約40人が聴講した。

オリエンテーションではNCKの発足経緯と、来年が創立50年との説明があり、続いて会長の長野宏樹氏（鹿児島教区）があいさつし、この講座の意図するところを説明した。

２日目は、第三講話として髙見大司教から「聖書の分かち合いとその実践について」の話があり、続いて、小共同体推進室長の下窄英知師（教区本部事務局）から具体的な方法が説明された。

第四講話は、神言修道会の岡崎才蔵師から「新約聖書における旧約聖書の引用について」という演題で行われた。イエスご自身も、またペトロやヤコブといった直弟子たちも詩編を口ずさみ、詩編に慣れ親しんでいたことがうかがえる。当時の庶民にとっては、朗読される聖書を聞くことが、聖書に関する知識を得る重要な機会だったとみられ、「各詩編は集会の場で繰り返し歌われたようだ」との説明があった。

今年は参加者が少なかったが、ある参加者は、「参加の回を増すごとに理解が深まってきた感がする」と率直な感想を語っていた。

初日の第一講話は髙見三明大司教が、『啓示憲章』について「見えない神とその秘められた事柄が明らかに示されること」と説明した。啓示はキリストがこの世に遣わされたことで完成し、さらに使徒たちによって伝承されてきたという。

第二講話は広島教区の福田誠二師による、「キリスト教の歴史における種々の啓示理解と今後のキリスト教の課題」。ハンス・キュンクというスイス人神学者は「もともとキリスト教的であった国々においてもキリスト教は信頼を失いつつある」という危機感を基に、キリスト教の根源的改革を「キリスト教はどのようにあり得るのか」という視点から考察すべきと指摘したという。

《続》教区シノドス これからどう進む ③

神のいつくしみを共に生き、伝える

２０１５年教区シノドス閉会後、長崎教区は「カテキスタ養成」「小共同体づくり」「ミゼリコルディア長崎の発足」を活動方針に掲げ、取り組んでいる。各担当司祭からの現状報告を掲載する最終回。

『ミゼリコルディア長崎』の発足
…苦しむ人や悲しむ人の友となり、「キリストのいつくしみを生きる」活動の始まり

福音化推進部 部長　紙﨑新一

これまでの私たちの教会

社会へ向けた活動は、信者の果たすべき使命とは縁遠いものでした。自己責任。信仰とは無関係。行政がやるべきこと。活動の参加者も社会復帰が最善のように説得したり、叱ったり。その人に寄り添うことより宗教的価値観が先立ち、イエスとファリサイ派との論争のようでした。

これからに向けての問い

だからこそ今、具体的な活動を始める前に問わなければなりません。私たちの教会は、人権や福祉、平和について今の社会より優れているのでしょうか。シノドスのテーマ「神のいつくしみ」も理解しているのでしょうか。福音のイエスは批判にさらされても命を守り生かしました。ぶどう園の労働者や百匹の羊や放蕩息子のたとえでは、過ぎるほどの御父の愛を示し、弟子たちには仕える者となるよう語り、自身も人間に仕えて命まで差し出しました。

これからの教会の鍵

そこで、具体的な活動としてまず始めることは、キリストのように何よりもまず、友として受け入れ、傾聴（相手に意識を100％向けて理解しようとすること）し、友として助け合い、どんな人も受け入れる社会であるよう働きかけることからです。

地域拠点の福音的共同体づくり

そのために、教会が地域の人々と共にいつくしみある社会を目指す、地域共同体づくりが必要です。地区ごとの評議会と連携しながら、教会の中に地域の人との出会いの場をつくる活動を支援し、教会の外に出て人と人とが支え合う活動を推奨します。

教会→地域、教会↔地域、この両方向へ神のいつくしみを生きる活動が展開します。具体的には、町おこしのようにみんなでわくわくしながら考案し、出来ることから始めます。

当初は、ボランティアのネットワークを各地区に組織立て、悩みごと相談窓口を開設し、困窮する方々のサポートを前面に打ち出す計画でしたが、地域の人たちと共にいつくしみを生きる積極的な交わりから、少しずつ個々の問題に取り組む心と体制をつくることを考えています。

信仰のハードルを下げてみると神の命の交わりが広がります。いよいよ来年4月から。

大浦天主堂オリジナル　メダイとロザリオ
天主堂下「オラショのお店」で販売します

メダイ　25×29㎜
十字架　35×48㎜
各1,320円（税込）～

お土産品と別に、大浦天主堂にちなんだ聖具をお求めになる方がたくさんいます。表を信徒発見の聖母、裏を大浦天主堂をモチーフとしたトップ、センターメダイにもなる少し大きめなメダイと、大浦天主堂尖塔の美しい十字架をモチーフとした十字架、またそれらを使ったロザリオを作りました。

開店時間　午前10時～午後4時（月曜定休）
問合せ先　大浦天主堂　TEL 095-823-2934
長崎市南山手町5番3号
カトリック長崎大司教区 国宝大浦天主堂保存委員会

交通誘導警備　常駐警備　イベント警備
（有）小田警備保障
警備員募集！
電話 095-856-6524　FAX 095-856-6523
長崎市横尾3丁目31-15　代表取締役 パウロ　小田　睦

不動産・会社・法人の登記や相続の手続
司法書士 山下 緑 事務所
代表者 ミカエル 山下 緑
所属 諫早教会　洗礼 井持浦教会　堅信 福江教会　結婚 浦上教会
〒854-0072 諫早市永昌町20-5　電話 0957-25-4886

人と人の絆を大切に・ご葬儀のご相談は
メモリードホール・典礼会館・中央斎場
長崎・諫早・大村・佐世保
株式会社メモリード　メモリード葬祭　検索　事務局　ペトロ　田川慶司
0120-44-6666

石碑
文字彫刻
墓地工事
リフォーム
墓地分譲
長崎石彫（ながさきせきちょう）
ヨゼフ　岩永　博明
☎(095)862-2469
長崎市梁川町 6-17　岩永ビル

世界遺産登録を記念して

3人の講師を招き 連続講演会

今夏、「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」が世界文化遺産に登録されたことを受け、長崎大司教区は10月7、14、21日にカトリックセンターで連続講演会を開催した。いずれも日曜日の夜7時からで、3回の講演会には延べ350人余が参加し、キリスト教や潜伏キリシタンをテーマにした講話に熱心に聴き入っていた。

1回目は、イエズス会司祭で上智大学教授の川村信三師。「幕末・明治初期の信仰と教会――再興、苦難、そして新たな出発」と題して講演した。川村師は、迫害・禁教下に起こった〝信徒発見〟について、時の教皇ピウス9世が「東洋の奇跡」と呼んだこの出来事を可能にした3つの要素を、信徒組織、伝道師バスチャンの予言、こんちりさんのりやく（小冊子の祈り）、と指摘。「東洋の奇跡は、潜伏キリシタンの組織的な『信仰』『希望』『愛』の継承によって実現した」とまとめた。

2回目は、長崎教区司祭であり長崎純心大学教授の古巣 馨師が登壇し、「切支丹禁制と潜伏キリシタンの生活」について語った。古巣師は「過酷な境遇の中で、潜伏キリシタンはなぜ『オナジ信仰』を手渡すことができたのか」を導入に、講話の最後には『カトリック教会のカテキズム』16項の箇所を示し、「私たちもその信仰の続きを生きて、この信仰を手渡していかなければ、この人たちの続きを生きることはできない」と結んだ。

最終回は、明治大学文学部専任講師の清水有子氏。清水氏は「日本におけるキリスト教の復活――浦上潜伏キリシタンの信仰活動」をテーマに、「浦上潜伏キリシタンとは何か」「信徒の復活」「浦上四番崩れと禁教高札撤去」について、潜伏キリシタンに関する研究上の争点となっている説の一部も取り上げながら、丁寧に解説した。

3回の講演会に参加した男性信徒は、「どのお話しも分かりやすかった。講話の中で『（潜伏キリシタンの歴史的意義を）日本人自身が理解していないが』という話があったが、確かに日本人はキリスト教のことを知らないと思うし、信者である私も勉強しなければいけないと感じた。これからも学んでいきたい。そして学んだことを自己満足に終わらせず、宣教の心で外に向かって信仰生活を過ごしていきたい。小教区の中で、身近なこと、あいさつ一つから宣教は始まると痛感した経験がある。自分自身に信仰的な裏付けがないと何か起こったときにつまずくこともあると思う。自分を磨いていきたい」と感想を語った。

黒島教会で聖歌を歌う

佐世保地区評議会

佐世保地区評議会は毎月1回、平本義和神父様（天神教会主任）のご指導で、教会巡礼を兼ね、場所を変えて聖歌の練習をしています。

世界遺産に登録された黒島教会は、今年の11月から約30カ月の工事に入る予定なので（見学は可）、その前に訪ねておきたいとの希望者もあり、各教会に参加者を募り、10月19日（金）に出掛けました。

昔は3千人余りいた信者も、過疎化が進み350人ほどとなり、うち半数以上は70歳以上、と高齢化の波にのみ込まれています。そんな黒島教会の信者を少しでも励ましたいと、大勢の仲間たちが駆け付けました。久しぶりにフェリーもターミナルも人波にあふれ、黒島教会主任の大山 繁神父様や信者さんたちに笑顔で出迎えていただき、帰りには姿が見えなくなるまで波止場で手を振って喜んでいた皆さんの姿が非常に印象的でした。

佐世保地区評議会
議長　山内茂雄
（相浦教会）

新刊良書

★シスター・ヒロ子の看取りのレッスン
著＝小出美樹

「末期がんの母が人生最後の二週間を過ごしたのは、長崎の高台にある聖フランシスコ病院のホスピス病棟だ。…かけがえのないシスター・ヒロ子との交流は、誰にでもできる慈愛に満ちた看取りのレッスンであり、笑いながら生きていくための優れたレッスンでもあったのだ。」KADOKAWA、税別1300円。

★　★　★

★はじめてのクリスマス
文＝ティム・ダウリー
絵＝ロジャー・ラントン
訳＝つばきうたこ

聖書に基づいたイエスのご降誕物語を、子ども向けにやさしい言葉とイラストで描いたお手軽ブックレット。ドン・ボスコ社、税別300円。

短信

〈堅信式〉
三ツ山教会では10月14日（日）9時のミサで中学生3人が、また、稲佐教会では10月20日（土）16時からミサがあり中学生4人と大人1人の計5人がそれぞれ堅信の秘跡を受け、共同体皆で祝った。

ぶどう園

▼ナザレの会　12月3日、2019年1月21日、2月25日、3月18日。〈各回いずれも〉月曜日の10時～13時、旧出津救助院、参加費千円（昼食含む）。祈りとみ言葉を味わう時間、他。お告げのマリア修道会主催。申込先・（担当）Sr.下窄 TEL 095-846-8300

▼浦田カズ代絵画展「地に愛と光を」　12月12日(水)～18日(火)、東京・小田急百貨店新宿店本館10階アートサロン。制作者は純心聖母会会員。カトリック美術協会会員、東京純心大学前学長・元教授。

▼山内清海師連続講演会（第5回）「終末論」　2019年1月6日(日)14時30分～16時、長崎市立図書館多目的ホール。入場無料。ミカエル会主催。

▼一日の祈りの集い　1月26日(土)三浦町、2月19日(火)滑石。9時15分～16時。参加費500円。聖書、筆記用具、昼食を持参。みつあみの会主催。各教会に配布の案内を確認の上、2週間前までに申し込み。

感謝

―香典返し―
長崎カトリック神学院
●永尾成子様（黒崎）
故ペトロ永尾 積様

右の方からご寄付・ご芳志を賜りました。お礼とご報告を申し上げます。

みことばにふれて 154

山口 雅稔 神父
（コンベンツアル聖フランシスコ修道会、本河内教会）

朝、昼、晩と日に三度、お告げの祈りを唱えます。わたしは幼児洗礼でしたが、お告げの祈りを唱える習慣のない教会で育ち、家庭でもお告げの祈りを唱えることがありませんでした。修道会の志願者として生活を始めた時、初めてお告げの祈りを知りました。それから20年以上経ち、お告げの祈りが習慣として身についてきています。

「主のみ使いのお告げを受けて、マリアは聖霊によって神の御子を宿された」。天使ガブリエルによって伝えられた御父のみ言葉を受け入れたマリア様は、聖霊によって救い主を宿されました。マリア様に倣ってみ言葉を聴いてみ言葉を宿す聖霊の神殿である自身を意識します。マリア様のようにみ言葉が心と体に染み渡り、聖霊による恵みに満たされたことを感謝します。ミサでみ言葉とご聖体をいただく時にもマリア様のお告げの時の態度を思い起こします。

「わたしは主のはしため、お言葉どおりになりますように」。マリア様に倣って、人生や生活、考えや思いにおいて、御父が主人であり中心であることを思い起こします。そして、マリア様のように主のはしため、主に仕える者、主のしもべを意識しながら、神のみ言葉が自分の身に成るようにと、主に自分の主座を渡します。

「み言葉は人となり、わたしたちのうちに住まわれた」。み言葉が人となって現実の世界に住まわれたように、マリア様に倣う人々のうちに救い主が生まれ共にいて働かれます。み言葉を受け入れた人々のうちに救いが現実となり、その広がりが神の国の広がりとなってきます。

すべては天からの恵みによるものです。「マリア、恐れることはない。あなたは神から恵みをいただいた」（ルカ1・30）。クリスマス、今年も救い主であるイエス様の降誕祭を祝います。お告げの祈りを唱えながら、わたしたちのうちに実現した救いの喜びで教会が満たされますように願います。そして、信仰の恵みをいただいた人々が、その喜びの福音を告げ知らせる宣教者となれますように、聖母マリア様と共にお祈りします。

教区典礼奉仕者養成講座〈全3回〉

聖金曜日の朗読奉仕
― 受難の朗読を中心に ―

第1回 1/27(日)　第2回 2/24(日)
第3回 3/24(日)
各回13時～16時 カトリックセンター
対象 典礼で聖書朗読を担当する方（経験不問）
講師 東島真奈美氏（フリーアナウンサー）
内容 朗読法　参加費 1人3,000円（全3回分）
定員 30人（要申込）
※1月6日（日）までに申し込み。ただし、定員に達し次第、締め切ります。
所属（教会／修道院）、氏名、連絡先をFAX（教区典礼奉仕者養成講座事務局 095-841-7732）でお知らせください。
問合先 佐々教会 嘉松 ☎0956-59-5559
主催：長崎大司教区典礼委員会

主の平安
カトリック式葬祭・飾付一式
（有）栄光式典社
代表取締役　ヨハネ　西村 勇二
長崎市辻町7-18　TEL(095)844-4011
24時間営業　FAX(095)843-9896

ハマチ・タイ養殖、アジ・イワシ加工、中型旋網
エテルナ・ワコー（株）
代表取締役　ミカエル　溝口 晃
〒858-0926　佐世保市大潟町586
TEL(0956)47-4380

タンスの中身は入れたまま
責任ある安全運送!!
（見積り無料・荷造り発送も致します）
貨物保険有り
・一般引越　・小荷物
・荒ゴミ捨て　・遠距離
・学生引越　・ピアノ運搬
24時間営業・年中無休
受付時間 7：00～22：00
水浦運送
シモン　水浦 幹雄
長崎市上野町12－3
TEL(095)(代)847－7151
844－1420

白蟻調査無料・駆除予防工事5ケ年保証付
白蟻防除施工士
大田白蟻研究所
代表者　大島和彦
（〒850-0811）長崎市矢の平1丁目14番15号
☎長崎 095－822－8436（ハヨイロ）
FAX 095－822－8488

ご先祖に心より感謝を・・・
材石治明
長崎本店　長崎市城栄町13-1　電話（095）846-3598
大村店　大村市民霊園内　電話（0957）50-3008

主の平安
株式会社 五島式典社（斎場）　五島中央会館　奈留会館
代表取締役　ヨゼフ　浦　昭
24時間営業
五島市上大津町1385番地1　TEL（0959）74－5551　FAX（0959）74－5552
五島市奈留町浦1899－1　TEL（0959）64－3101　FAX（0959）64－3102